

---

# 東方吸血鬼伝

ロリは正義

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方吸血鬼伝

### 【Nコード】

N4959Z

### 【作者名】

ロリは正義

### 【あらすじ】

・博麗神社のとある一室、そこで緊急会議が開かれていた・

？「……………皆集まったわね？」

？「まったく……………今日は何の用事で呼び出したのよ。半端な用事だったらピチユらせるわよ？」

？「少しは落ち着きなさいよ．．．．．今日集まって  
もらった理由は、

【100年計画】について話し合うためよ」

動きだす妖怪の賢者。

荒れる幻想郷。

【100年計画】とは一体何なのか。

―― 東方吸血鬼伝 開演――

（この作品はほのぼの系コメディです。シリアスなものではありません）

ネタバレですが、この作品の主人公はフランちゃんです。

この小説は小説作品初心者の処女作です。

そのため無理矢理な展開、文がおかしいなどのことがあります。

ここはこうした方がいい、これはダメだというのがあればご報告ください。作者は泣いて喜びます。

（12/18 話を根本から変えるにあたり、題名を

「吸血鬼に憑依しちゃった！！」から

「東方吸血鬼伝」に変更いたしました。  
)

## ブログ（前書き）

土日の定期更新を目指します。

調子が良い時は、平日にも投稿します。

## プロローグ

〽12月22日、午前0時〽

- ? 視点 -

博麗神社のとある一室。そこで私はこの有力者達を集め、緊急会議を行っていた。

「……………皆集まったわね」

私がそう聞くと、周りの者が一斉に頷く。

「まったく……………今日はなんの用事で呼び出したのよ。半端な用事ならピチユらせるわよ」

スペルカードを出しながら、そう脅してくる不良巫女。

「少しは落ち着きなさいよ……………今日集まってもらった理由は、1000年計画】について話し合ったためよ」

『…!』

私が今回の議題を言つと、一部の者が強く反応した。

「はあ?1000年計画?そんなもん、一度も聞いたこと無いわよ?」

不良巫女がそう言うと、大多数がその言葉に頷いていた。

「知らないのも無理は無いわ。この計画は一部の者で極秘裏に進めていたものだもの」

「……なら何故それを今この場にいる全員に知らせるのかしら？……私は余り気が長くないの、これ以上焦らすのならマスパ食らわせるわよ」

そう言いながら傘を突きつけてくるUSC。

「本当に気が短い奴しかいないわね……」

「ねえ、本当にそれは大丈夫なの？あの子の「狂気」はそう簡単に消えるものではないはずよ？」

額に手を当て独り言ちると、隣の親友が心配そうに聞いてきた。

「大丈夫。今「狂気」は、全盛期の100分の1まで落ちているわ。でも最近その「狂気」が増えてきて、もうこれ以上減ることは無いと見えた。だからチャンスは今しか無いのよ。」

そう、今しか無いのだ。あの子の狂気を取り除けるのは。

「それに私達は、あの子の仮のお姉さん（自称）でしょ？なら信じましょう。あの子が「狂気」になんて負けないって」

「……そう、ね。なら私は、切り離れたあの子の善の部分を迎えに行けばいいのね」

「ええ、お願いね」

そして親友はそのまま部屋を出た。

「私もこれで失礼いたします」

閻魔もそれに続き、退出する。

「……話は終わった？なら早く教えなさい。あいつと話していたあの子とは、「狂気」とは、そして【100年計画】とは何かをね」  
珍しく空気を読み、黙っていた腐れ天人が聞いてきた。

「安心しなさい。《幻想郷》に関わるあなた達には、嫌でも全て知ってもらってから……」

手に持っていた扇子を開き、口元を隠しながら、私はこの場にいる全員に向けてそう言い放った。

——その会議の日、月は紅く光っていたという——



## プロローグ（後書き）

いつか詰まりそうで怖い

一話（前書き）

ゆゆ様完全キヤラ崩壊。

## 一話

〽12月23日、午後2時〽

《幻想郷 人里》

- 主人公視点 -

僕の名前は紅月狂あかつきまよゆう 16歳

ここ、幻想郷に住むごく普通の一般人です。

生まれてすぐに捨てられたのか、僕を拾ってくれたお爺ち  
やんとお婆ちやんと一緒に、平和に暮らしています。

そんな僕の特徴は、紅い眼。

身長が六〇七歳ぐらい。

そしてよく女の子に間違われる……あまりこの事には触れたくない  
ので、詳しくは話さないという事で。

そんな僕は、ある日友人の家に遊びに来ていた。

> 友人宅 <

「うわ!!!もう残機0だよ!ま、待って!あああああ……もう負

「けちゃった」

「だ、大丈夫だって！！次頑張ろうぜ！」

酷く落ち込んでいる僕を励ましてくれている、このとてもいい人は僕の兄のような存在で、名前は氷野冬樹ひよしのふゆきと言う。

少し……だいぶバカなのが玉に瑕だけど、人当たりもよく、近所の人気者で、いつも困ってる時は助けてくれるとてもカッコいい人。

そんな彼を、僕は冬兄と呼んでいる。

さて、今やっていたのは【東方project】というS

TG。

ここ幻想郷の主要人物をモチーフに、ボーダー商事という会社を作ったもので、たしかD とかいうのと一緒になぜか冬兄の家の前に置いてあった。

ついでに言うと、僕はそのゲームのあるキャラに似ているらしく、たしかふらんどーるなんちゃらって名前の吸血鬼に瓜二つなんだって。

見たことないから分らないけど。

ともかく僕はその東方projectの「紅魔郷」というものをやっていたんだけど、下手すぎるせいか最初のボス、ルーミ

アという女の子に負けてしまった。

「グスツ、ありがとう。でももういいや」

冬兄の優しさに感動し、おもわず涙ぐんでしまう。

「そ、そっか、なら良いんだ／＼」

僕の返事を聞くと、何故か冬兄の顔が赤くなっていた。  
風邪だろうか。

そしたらやだな……冬兄は元気な方が良いからね。

「冬兄、顔赤いけど熱があるの？なら早く休んだほうがいいよ。」

身長がかなり低く、座高も低いため、下から覗く形で聞くと

「ほ、本当に大丈夫だから心配すんな？な？狂の兄ちゃん  
は、簡単に風邪に負けると思っか？」

そう言いながら、僕の頭を撫でる冬兄。

ふみゅっ……相変わらず冬兄に撫でられると落ち着くな

「(ナデナデ)」

「ふみゆう……………／／／」

暫くそのまま撫でられていると、家の中に戸を叩く音が響いた。

冬兄は僕の頭から手を離して、玄関に向かって歩いていった。……………もう少し撫でられていたかったな。

すこし時間が経つと冬兄が帰ってきて

「なあ狂。さっき来た人だけど、実はお前の事聞いてきてさ。今家にいるというと、連れてきて欲しいって言われてよ。そういう訳だから一緒に来てくれないか？」

頭を掻きながら、冬兄は申し訳なさそうにそう僕に頼んできた。

「ほえ？一体僕になんの用事だろう」

「それは俺にも分からない。でも、もしもの時は兄ちゃんが助けてやるからな！」

そう力強く言う冬兄。やっぱり冬兄は頼りになるなあ。

「うん！ありがとう！」

感謝の意味を込めて元気一杯に返事すると、冬兄はなぜか鼻を抑えて上を向いていた。

「フガフガ……よし、あんま待たせちゃ失礼だから早めに歩いていこう」

「うん！」

僕と冬兄は、手を繋ぎながら玄関に向かった。

少年（？）移動中

……失礼な、僕は正真正銘の男の子（娘）だよ！っていま誰か子の部分で変な言葉重ねたでしょ！！

……まあいいや、話を戻すけど、今僕達は玄関の前まで来ていた。

「……なんかこの扉を開けたら、もう戻れない気がする」

「奇遇だな、狂……俺もそう感じてたわ」

何故だか分からないけども、この扉を開けたら、とんでもないことに巻き込まれる気がしてならなかった。

「……覚悟を決めて、開けるか」

「うん、そうだね」

そう言って、ドアノブに手をかける冬兄。

そのまま扉を開けると、目の前にはたくさん蝶がいた。しかもただの蝶ではなく、一体一体が妖しい光を放ち、まるでガラスでできているのではと思うほど、その蝶達は透き通っていた。

「ポカーン」

僕達はお互い唖然としてみると、蝶達がこっちに向かって一斉に飛びかかって来た。

「うわぁ!」

前の冬兄が蝶に触れると、その触れた蝶は音も無く砕け散る。

それと同時に何故か冬兄が倒れてしまった。

「冬兄!？」

焦って近寄ろうとするけど、無情にも迫ってきていた蝶に触れてしまい、意識が、まるで麻酔でも打たれたかのように遠のいて行った。

「冬……にい……」



これを最後に僕の意識は完全に闇の底に落ちた。

- 亡霊姫視点 -

今私の前にはいかにも好青年そうな男の子と、よく見知ったかわいらしい顔の男の娘（誤字にあらず）が倒れていた。

「ふう……さて、《紫》に伝えないと行けないわね」

そう考えた私は家の扉を閉め、人気の無い路地裏まで来ると、いるであろう人物に声をかけた。

「紫、見ているんでしょう？仕事は無事終えたわよ」

そう言うと、目の前に二つのリボンが現れる。その間が裂けると、無数の眼が覗く空間ができていた。

……何度見ても慣れないわね。

「お疲れ様、幽々子。」

「まったく……あの妖精と一緒にいるなんて聞いてなかったわよ？最初は別々にやる予定だったのに」

頬を膨らませながら怒る。あれには本当驚いたわ。

この会話から分かる通り、私の名前は西行寺幽々子。  
能力は「死を操る程度の能力」。  
仕事は主に冥界の幽霊の管理をしてるわ。

そして私の前に現れたのは、友人の八雲紫。  
能力は「境界を操る程度の能力」。(さっきのも、この能  
力で作った『スキマ』というものである)

紫はここ、幻想郷の管理をしているのよ。

「仕事にアクシデントは付き物よ。後は私が事後処理して  
おくからそれで許して。……所で久しぶりにあったあの子はどうだ  
った？」

少しも反省している様子のない紫。  
……少し自慢してやろうかしら。

「あの子なら相変わらずのかわいさだったわ。特に撫で  
られてる時の顔が忘れられないわ／＼／＼」

実は外から視覚不可の状態で見えていた私。べ、別に羨ましくてあ  
の時、強く戸を叩いたわけじゃないんだからね！／＼／

「何ですって！？撫でられた時の顔！？……もちろんその  
時の写真も撮ったのよね？」

「もちろん」

ちょうど取材に来た烏天狗から、たしか”カメラ”とかいうのを脅h……お話して借りていたんだけど、まだ持っていて良かったわ。 )この時、紫も脅h・・・お話に参加していた。 )

「その写真！買った!!」

「価格は白玉楼の食費三ヶ月分になりまゝす」

これぐらい払って貰わないと、割に合わない。

あの撮った時にでる光で、バレるかもしれないという危険を侵してまでして手に入れた、この写真にはね。

すると紫は顔を伏せ、「白玉楼の食費三ヶ月分といえば、家の食費の約60倍……もしこの取引を受けたら、八雲家は破産するかもしれないわね……でもあの写真はそれだけの価値がある……どうする私!!」と頭を抱えながら葛藤していた。

「紫、あなたは何を悩むというの？悩むことなど無いはずよ?……ほら、想像して御覧なさい、あの子が顔をお腹に押し付けてスリスリしてくる姿を、あの子のふやけた満面の笑顔を、そして上目遣いで見てくる姿を!!」

「!!」

私の言葉にハツとする紫。 ……まったく気づくのが遅す

きるわよ。

「……そうよ、私は何を悩んでいるの？お金ぐらいあの子への愛があれば、どうとでもなるじゃない！！幽々子！その取引受けるわー！」

「（計画通り……）（毎度あり）」

私は込み上げてくる笑いを扇子で隠す。

紫って時々？になるのよね……そこが紫の良いところ？（？）  
でもあるんだけどね。

白玉楼の食費三ヶ月分を払うという誓約書を紫に書かせ、  
例のブツを渡した。

「これで！これで私は輝く毎日を送れる！！！」

天に向かって両手を突き出し、狂喜乱舞する初代？。

「紫、待ちなさい。」

「なに！？」

暴走する紫の肩に手を置き、そう呼び止めると、物凄くニヤけた顔をしながら振り向いてきた。

……少し恐怖を感じたわ。

「あなたは重要な事を忘れているわ」

「えっ？」

「……あの《100計画》が成功した時、私たちは写真ではなく本物に触れる事が出来るのよ!!」

「!!!」

「ならこんな所で浮かれてはられないんじゃないかしら？」

「!!!」

まったく、これじゃあ先が思いやられるわ。

「幽々子!!絶対にこの計画、成功させましょう!!」

「ええ!私達の力であの頃の状態に直して見せるのよ!」

失敗は許されない。成功すれば万々歳だけど、もしもの時はあの子を消さなくてはならないのだから。

「「えい、えい、おー!!」」

そうして私達は、決意をさらに固めた。

一話（後書き）

このままではゆかりんがいじられキャラになってしまいそう。

次回、ヤマザナドウ登場。

報告：何故か文頭の一字開けが出来ない

一話（前書き）

警告！映姫好きに注意報発令！！

## 一話

### 二話

（12月24日、午後2時）

### 《地獄裁判所幻想郷支部 第一法廷》

- 山田視点 -

…今誰か私の事を山田と呼びませんでしたか？え？何も言っていない？それは失礼いたしました。

さて、まずは自己紹介ですかね。

私の名前は四季映姫・ヤマザナドゥ。

能力は「白黒はつきりつける程度の能力」

ここ地獄裁判所幻想郷支部の閻魔（神）をやっています。

よく間違えられるのですが、私の本名は 四季・映姫 で、実はヤマザナドゥは担当部門をあらわす役職名なんですよ。



ヤマは「閻魔」、ザナドゥは「楽園」をそれぞれ意味しているんですよ？知っていましたか？

そんな私は、今日も地獄裁判所に定時出勤しました。

出勤したのはいいのですが、実は最近仕事内容が変わって私自身が死者を裁く事は皆無に等しくなりました。

法廷に来てもただダラダラしてるだけなんです。

そんな訳で

あまりにもひま……有意義な時間では無いと思い、紫が前にくれた『マ オカート』というゲームをやるのが最近の日課なんですよね。  
(これも有意義な時間では無い)

ではやっていきましよう。

(しばし映姫様の独り言をお楽しみください)

「(プー、プー、プー!!「ヒュイゴ」)よし!スタートダッシュ成功です!早速一位になりましたよ!

……この雪山の上のハテナ ックスは、たしか一位でもスターが出

るんですよね。

(パリン！タララタララタララタララタララタララ、ダラン) やった！無事スターを獲得出来ました！

- 2分後 -

…スターを出し惜しみ過ぎて、6位まで落ちてしまいました…(タンタンタン、タンタラー)…ついに最終ラップですね。ならば！

「今こそ飛躍の時！我が志は千里にあり！！(SR曹操)  
いけー！私のステ(ヒュ)「ケケケケ」ヒュ)ああ！前口上言  
つてたら、テ サで恐竜モドキにスターを取られてしまいました！  
」

(白OFF、黒ON) 映姫の中で何かが切り替わった音

「くっ！おかげで今や最下位じゃないか！あの恐竜モドキめ」。

む！そのゴリラ！邪魔だ！(ゴン！ヒュ)…(ああああ…！重  
さの事忘れてて、逆に弾かれて谷底に落ちたああ…！

クソ、でもまだあきらめん…！

これに賭ける！(パリン！タララタララタララタララ、ダラン)

……キラーきたああああ…！！！！

ははははは！！ついに私の時代が来た！！粉碎、玉砕、大喝采！行くぞおお！！（今の映姫は、余りの感動に日本語がおかしくなっています）

（ボン！！ゴオオオ、チュドン！チュドン！チュドン！チュドン！）  
7位！6位！5位！4位！ははっ！見ろ！人が（？）ごみのようだ！！はっはっ！！！！

…お！？貴様は私のスーを盗った恐竜モドキ！！

最後に貴様を巻き込んで、私は3位になる！ははははは（タンタン  
タンタンタンタンタン）スーで回避すんなああああ！！！！  
（ポフン！！）何！？効果が切れただと！？

（キュピーン！）ああああああ4位で終わったああああああ！！  
！！イイヤアアアアアアアwhjxwhyadavnu  
awm！！！！！！！！

（少女暴走中）

チツ…あの恐竜モドキめ…散々私の事をコケにしやがって…次に殺  
る（誤字にあらず）時が貴様の最後だあ…

おっとこれは失礼。

（黒OFF、白ON）

さて、そろそろ柱の裏に隠れている者に話掛けますか。

「いい加減出て来たらどうです？」

私は手に持っていたD をその隠れているであろう柱に突きつける。

「…もう少し早く気付いて欲しかったわ」

出てきた人物は案の定、紫でした。

「法廷に入った瞬間、すでに気付いていましたよ？」

「ならなんで無視したのよ」

「え？そんなの決まってるじゃないですか。あなたの反応が面白いから、無視したらどんな風になるのか見て見たかったからですよ」

至極当然（？）の事を言うと、紫は膝と手を地面につけて「幽々子も私に、反応が面白いって言ってたきたのよね…私って何なの？まさかいじられキャラなの？」とか言って落ち込み始めてしまいました。

「…まあいいわ、今日はそんな話をしにきた訳では無いのよ」

何とか立ち直った様子の紫は、急に真面目な顔をして、話を切り出してきました。

紫が真面目な話をすると言えば、あれしか無いですね。

「…という事は『フランドール・スカーレット』ちゃんに対する100年計画』についてですね？」

「その通りよ」

やっぱり……

すると紫は両手の手のひらを上にして、差し出してきた。

「分かってますよ…これですね？」

その両手の上に一枚の紙を置いた。

その紙とは

- 『魂の分離及び再結合』の特別許可証 -  
と書かれた物で、あの会議の時紫に頼まれていた物でした。

「確かに戴きましたわ」

「まったく…あの日からずっと本部に頼みこんだのに、労いの言葉も無しですか？まあいいですけど」

本当にあれは大変でした。3日間泊りがけで頼んだんですから。

まあ、説得の決め手はフランちゃんの写真でしたけどね。

「それで？いつフランちゃんの魂を戻すんですか？1000年経つのにまだ2ヶ月ありますが」

「今日よ」

…え？

「な、何故そんな急に!？」

「落ち着きなさいな。理由は……（プロローグに書いてあるため割愛させていただきます）……だからよ」

…という事は？という事は!？もうすぐ（自称）私のフランちゃんが帰ってくる?!？予定通り後2ヶ月後だと思ってたのに!!

（この時映姫は興奮の余り、フランが狂気に飲まれる危険性についてまったく聞いていなかった）

(白OFF、黒ON)

……み・な・ぎ・つ・て・キターー！！！！

ついにこの日が来た！！我らが妹様が復活する日が！

この時に備え、私は19億5670万通りの妹様の萌える仕草を経験(妄想)しといたのだ！！遂にこれが役立つ時が来た！！

もう少し用意の時間が欲しいが、そんな暇は無いらしいし、フランちゃんに会えるのならこんな所で油を売っている訳にはいかん！

「紫！！」

「はい！？」

「そうと決まればすぐに紅魔館に行くぞ！早くスキマを開け！！」

「え、ええ、そのつもりだけど来る時には無かった能力遮断の結果が出来てて、スキマが開け無いのよ」

「はあ？そんなもん自分で壊せるだろう！なにか弱い女の子ぶつてんの？バカなの？死ぬの？」

「い、いやそんなつもりじゃな」使えねえ奴は黙ってる」はい……」

すると紫は端で体育座りをしてのの字を書いて、落ち込み始めた。  
使えねえからこんな風に言われるんだよ。

「しょうがない、なら私が結界の壊し方という物を見せてやる」  
本当はゆっくり解くが、今はそんな悠長な事をしてられない。  
という事で私は結界の前まで来ると、静かに構えて…

「うおらあああ!!!」

全力のストレートを叩き込んだ。

すると結界は大きな音をたてながら崩れ去った。

「ま、こんなもんかね」

「（ポカーン）」

振り向き、少しどや顔をしながら言う私。

そんな私をあり得ない物でも見ているような目で見てくる紫。



「おい」

「ひっ!？」

私が話掛けると涙目になる紫。

「さっさとスキマ開けるや」

「は、はいいいい!!分かりましたああ!!」

人が頼んでいるのに泣くとは、なんと失礼な。

……ミンチにすんぞ？

「ひいいい!!」

私の考えている事が分かったのか、音速を超えるほどの早さでスキマを開く紫。

「ギョ、ギョギョ」

「うむ、うむ苦勞」

まったく…時間がかり過ぎなんだよ。

まあいい、もうすぐ会えるのだからな、フランたんに！  
フランたん！今お姉さん（自称）が会いに行くからね！！

「敵（？）は紅魔館にあり！！ぎやはははは！！！！」

そう言いながら私と紫はスキマの中に入っていった。

「…あの閻魔をあんな風にするなんて……フラン、恐ろしい子」

スキマが閉じられる時、そんな嘆きが聞こえたとか……

二話（後書き）

実は2話を2回消すという失態を犯していた。

次回、紅魔館進出

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4959z/>

---

東方吸血鬼伝

2011年12月24日08時47分発行